

---

# 東方真偽混

ミコト

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

東方真偽混

### 【Nコード】

N0941X

### 【作者名】

ミコト

### 【あらすじ】

外来人が人里にやって来た。一日に四人も。八雲紫の仕業と思った博麗霊夢だったが、紫曰く「誰かが故意に四人も入り込ませた」らしい。相変わらず胡散臭い笑みにいまいち信用出来ずにいた霊夢だったが、巫女の勘が事実だと告げていた。その頃、霧雨魔理沙や東風谷早苗もこの異変に気付き、動き出していたのだった。幻想郷の危機かもしれないというのに、何故紫は動かない？そんな疑問を抱きつつ、彼女達は異変の犯人を探す。

## 予定された幸運

幻想郷、幻想と化した者達が暮らす楽園。

その魅力溢れる世界や可愛らしい少女達に惹かれ、幻想郷に行きたがる者は少なくない。

しかし実際に幻想郷へ行けた者はほんの一握りだけだった。

そのほんの一握りの人間ですら、殆どが妖怪に喰われるかして死んでいる。

幻想郷を知らない者ならなおさらだ。

大体が何の能力もない弱い人間なのだから、当たり前だろう。

つまり、普通なら外来人は死ぬ。

誰かが協力でもしてくれない限り、人里に辿り着くことすら出来ないだろう。

ところが今日の昼過ぎ、無傷の人間が四人も人里にやって来た。

奇跡だと騒ぐ人間や風の噂を聞いてやってきた天狗、よく分かっているがとりあえず話に加わる妖精や妖怪……

その騒ぎは人里の守護者上白沢慧音が怒りを爆発させるまで続いた。

「ああもう、五月蠅い五月蠅い！」「色々気になるのは私も同じですが、聞いたところでどうにかなるような話ではないでしょう！？解散してください！」

このまま居続けた所で痛い目にしか遭わないと察した周りは、ぞろぞろと帰って行く。

そして広場にいるのが慧音と外来人四人だけになると、ひとまず慧音は外来人達を自分の家へ連れて行くことにした。

と、その時。

慧音と外来人達の目の前で、一人が忽然と消えてしまった。

訳の分からない状況に混乱しつつも、四人は外来人の一人をそこら中探す。

しかし、雪のように白い髪と太陽のような橙色の瞳が特徴的だった眼帯の青年は、全く見つからなかった。青年が一度瞬きすると、そこは人里ではなかった。

紅いカーテン、紅い壁紙、紅い絨毯。

全てが紅で統一されたその部屋は、青年を困惑させるのに十分過ぎた。

ふと横を見てみれば、部屋に似つかわしくない青いメイドが、凜とした様子で立っている。

青年がこちらを見ていることに気付くと、メイドはこちらを見つめ返した。

その刃物のような輝きの青い瞳がどこか恐ろしくて、青年は正面に目を逸らす。

「初めまして」

王が掛けるような気品溢れる椅子に腰掛けていたのは、可愛らしい少女だった。

まだ十にも満たないような幼い顔立ちをしているが、背中に生えていると思われる蝙蝠のそれに似た翼が、ただ者でない雰囲気醸し出す。

「私はレミリア・スカーレット、誇り高い吸血鬼。  
あなたの名前は？」

これまた紅いマニキュアが塗られた指先で、レミリアは青年を指差した。

「……森近真人です」

レミリアとメイドは顔を見合わせる。  
そして噴き出した。

「もっ、森近というのね……くっ」

「くすくす……」

何か笑われるようなことでもしただろうかと戸惑う真人を気にすることもなく、二人は笑い続ける。

真人は知らないだろうが、とある古道具屋の店主の名字も森近という。

彼は髪が真人と酷似していた。

男の髪型が似たようなものになるのはよくあることだが、髪色まで同じとなっては酷似しているとしか言いようがない。

それがまるで兄弟のようにも見え、二人にはおかしくて仕方なかったのだ。「……ふう、失礼したわね」

話を戻すけど、今日からここで働いてもらうから」

突然瞬間移動させられたかと思えば、笑われた挙句、働けと言われる。

何故よりによって自分なのかと真人は思ったが、この先どうしようか悩んでいたところであったため、それを了承した。

「はい、分かりました」

「物分りがいい人間は好きよ」

## 心の広い者

あれから数十分ほど探したが、慧音達は手掛かりすら掴めなかった。彼はそれなりに離れた場所、紅魔館にいるのだから当然だが。

疲れた様子の三人に温かい茶を渡すと、慧音は座布団に腰を下ろした。

「きっと妖怪か何かに喰われたのでしょうか。  
今まで無事だった方がおかしいんですから」

外来人とはいえ人里にいる者を襲う妖怪がいるとは思えなかったが、慧音はそういうことにしておく。  
でないと謎が多過ぎて頭がいっぱいいっぱいになってしまう。

「怖いよ、お兄ちゃん」

「大丈夫、お前は絶対守るから」

黒髪の青年が妹らしき金髪の子供の頭を優しく撫でた。  
怖がらせてしまったようだ。

それを安心させようと慧音は口を開く。

「元の世界に帰りたいというのなら、確実な方法がありますから安心してください」

しかし、三人はそれぞれ帰る気がないことを示した。

兄は言葉で断り、妹は首を横に振り、先程から黙ったままの白い髪の娘は手を横に振る。

その行動が理解できなかった慧音は、しばらく言葉を発することが出来なかった。

娘はともかく、この怖い世界に残ると決めた兄妹の考えが全く分かっていなかったのだ。啞然としている慧音にどう説明するべきかと悩んでいると、扉の方から派手な音がした。

「話は全て聞かせてもらった！」

青いとんがり帽子に白のリボンを結び、水色のケープを纏った金髪の少女が靴を脱いで上がってくる。  
その後ろには破壊された扉が倒れていた。

慧音が震えている。

これは間違いなく怒りというものだろう、少女はそれに臆することもなく兄弟の近くに座り込んだ。

「私は霧雨魔理沙、普通の魔法使いだ。  
引き取り手を探すのは任せてくれ」

妹が目を輝かせて魔理沙を見つめていると慧音が不意に立ち上がる。  
そのまま魔理沙の元へ歩み寄り、魔理沙の頭を手で押さえつけた。  
これから何が起るかなんて全員分かっている。

「人の家の扉を壊すんじゃない！」

「ごふっ」

聞こえた鈍い音に魔理沙の身を案じる三人。  
勢いはそこまでなかったものの音からして脳震盪は免れないだろう。



しばらく何が起こったか分からないような表情をしたかと思うと、魔理沙は畳の上に倒れた。

「……ちよつと医者をお願いします」「偶然私が来ていたから良かったものの、いなかったら竹林まで来ていたのかしら？」

「……すまない。」

彼女らが例の外来人で、こちらは竹林の八意永琳先生と弟子の鈴仙・優曇華院・イナバです。

そして患者の魔理沙なんだが……」

「はいはい。」

ウドンゲは休んでいいからね」

永琳と慧音が奥の部屋に向かうと、部屋には外来人三人と鈴仙だけになった。

互いに面識がない上に、鈴仙は人見知りが激しく俯いたままだ。会話なんてものはなく、嫌な雰囲気は四人を包み込む

「うさぎさんの耳だー」

と思っただけだった。

二人はともかく、妹は鈴仙の耳を見ていて黙っていただけだった。

「ねえねえお姉さん、その耳ってどうなってるの？」

妹がニコニコと笑いながら鈴仙にそう問い掛ける。

お姉さんという呼び方やこういった性格の子供に話し掛けられるの

が新鮮で、鈴仙は無意識に口角が上がっていた。

「……これ、取れるよ」

そう言って耳の根元のボタンをいじると、ものの見事に耳が外れる。仕組みは分からないが、どうやらボタンが耳を頭に付けていたようだ。

現に今、妹の頭に耳が生えている。

「すごいねー」

「……楽しい？」

「うん！」

鈴仙の表情は見えないものの、楽しそうなのは感じ取れた。

子供は仲良くなるのが早い。

その様子を遠目に眺めていた永琳と慧音は、密かにこんな会話を交わしていた。

「珍しい、ウドンゲが初対面の相手と話すなんて。

あの子、サイコセラピーの才能があるかもしれないわね」

「外の世界に帰る気はないそうだが？」

「ふうん……」

引き取ろうかな」

知らぬ所で話は進んでいく。

主人の珍しい和菓子が食べたいという呟きから、冥界の幽霊と庭師

が幻想郷中を飛び回っているように。

## 相次ぐ偶然

ついこの前に神霊が溢れ出したと思えば、気が付けば冬。

時の流れるのは早いと思いつつ、早苗は真っ白な息を吐くと、山から飛び去った。

その途中で紅魔館が何やら騒がしかったが、寒い誰かに会う前に急いで人里へ向かった。

紅魔館は雪遊びでもしていたのだろう、きっとそうだ。

人里の適当な場所に降り立つと、早苗は誰かに話のネタにされていることに気付く。

「あの巫女さんが霊夢さん？」

「あれは山に住む巫女さん、霊夢じゃないわ」

声のする方を見てみれば、見慣れぬ子供と竹林の兎が会話していた。あの人見知り兎が珍しいと思いつつも、早苗は外来人がいるらしい上白沢家に向かうことにした。

外への興味は無くなっていなかったのだ。

「え、話だと四人じゃありませんでしたか」

「一人は行方不明、二人は引き取られたよ」

つまり一人は残っているということだろう。

しかし上白沢家には慧音と早苗、そして後ろ姿からして妹紅と思われる娘しか見当たらなかった。

「もう一人は何処に？」

「いや、いるだろ」

くると振り向いたその娘は、竹林住まいの自警団などではなかった。

落ち着いた紫色の瞳にシックな洋服、よく見てみればその髪は妹紅より短い。

正直失礼だとは思うが、本人より大人っぽいと早苗は思った。

「……初めまして」

「あ、はい、初めまして。

外来人の方ですよね？」

「ええ。

如月怜音といいます」

早苗がまだ外の世界にいた頃、こんなニュースを見た覚えがある。  
有名な和菓子屋の社長の娘が行方不明になったというものだ。

短く切りそろえられた白い髪と笑顔が特徴的で、そして名前が怜音。  
変わった名前だったため未だに覚えていた。

相手の過去にやたら突っ込むのは良いことではない。

何事もなかったように自分も名乗った早苗だったが、何処か不安で髪を弄った。

「……分かったちゃいました？」

そう小さく笑う相手には全てを見透かされているような気がして、早苗は深く頷く。

やはりスルー出来ていなかったようだ。

「私も外の世界にいたんです」「なるほど、迂闊でした」

何が迂闊だったと言うのか、苦笑している早苗に笑いかける。

いったい何が起こっているのか分からない慧音は、ひとまず昼食を作ることにし、台所へ向かった。

「あの、最近の外はどうでしたか？」

面白いものが発明されたり、自分のことがニュースになっていたり。そんな外への興味は絶えなかった。

怜音はそれを見透かしたかのような微笑を浮かべ、口を開いた。

「ごめんなさいね、私も知らないの」

「…はい？」

「私、過去の外から来たと言うべきですから」

外来人が四人来た時点で怪しいとは思っていたが、過去から来たと言うのなら、これは異変なのだろう。

一瞬無駄足だったかと後悔しかけた早苗だったが、やはり来て良かったと思った。

「それはあなたの能力ですか？」

「それは話せない。」

でも私の能力ではないわ」

「ありがとうございます、私はこの辺でお暇させてもらいます」  
前回の異変では霊夢に先に解決されてしまったが、今回は彼女に勝てるかもしれない。

早苗はそんなことを思いつつ、慧音の家を後にした。早苗がそれに気付くことはなかったが、今、人里中の和菓子職人たちが奮闘していた。

白玉楼のお嬢様が珍しい和菓子を求めているのだ。  
しかし人里中の和菓子は全て食されたことがあり、職人たちは新しい物を作らなければならなかった。

「どうしよう、日が暮れる前には手に入らないと叱られる…」

駆り出された庭師の魂魄妖夢は足を止め、今にも消えそうなか細い声でそう呟く。

飛び回る幽霊たちも同じ心境らしく、まだ昼間にも関わらず焦りの色が見えた。

「……慧音さん、急に冷え込んできましたね」

「多分白玉楼の幽霊たちですよ。」

また亡霊のお嬢様が何か探させてるんでしょうかね。  
昼食が出来るまでまだしばらく掛かりますから、暇なら外で話でも聞いてきたらどうでしょう？」

確かに退屈だった怜音は、上着の前を閉め表に出て行った。

しばらく散策していると洋服の少女を見付ける。

何やら探している様子だったため、気になった怜音は少女の元に歩み寄った。

「その人、珍しい和菓子を売ってる店とか知りませんか!？」

少女の方から声を掛けられ少し戸惑うも、怜音は一つの考えが浮かんだ。

やけに帰りが遅いなと思いつつ慧音が机に料理を置くと、先ほどもでは無かった書き置きが目に入る。

【怜音さん借ります。  
魂魄】

多分このまま帰ってこないだろう最後の外来人に、一人で食べるには多い豚汁の前で苦笑している慧音だった。



## 余計なお世話

しゃがみ込んで両手で帽子を押さえ、通称カリスマガードをしているレミリア。

その服はボロボロであり、激しい弾幕戦が繰り広げられたことが分かる。

「外来人を誘拐して私の手間を増やすんじゃないわ。あとあんたも雇われるな！」

巫女の勘で紅魔館に寄った霊夢が見たのは、執事服を着た外来人の一人と咲夜だった。

尚、美鈴は眠っていた。

仕事の仕方を教えている咲夜にとりあえず弾幕ごっこを仕掛け、霊夢は何故外来人がここにるか聞き出す。

そして今に至った。

あのまま人里に直行していれば、消えた真人を探して幻想郷を飛び回る羽目になっただろう。

巫女の勘で結局紅魔館にたどり着くだろうが、無駄な真似をさせられそうになったのが何となく不愉快だったのだ。

「いや、帰る気もなかったですし、これはラッキーだなと……」

「敬語で喋るな、それと最後まで喋れ草食系！」

正直意味をよく理解していないが、どこかで聞いたその言葉を吐く霊夢。

血の気が多い人だなと思いつつ真人は言葉を続けた。

「……あー、確かに咲夜さんが何も言わず俺を誘拐したのは悪かったかもしれない。

だが、それは俺に仕事と居場所を提供してくれたことに繋がる。

あのまま何事もなかったとしてもあなたの手を煩わせることになっただろうし、どうかレミリア様と咲夜さんを許してくれないか」

「そう、あんたが言うなら許すわ。

ここは休みも給料もないのに優しいのねー」

言葉を失っている真人を見やることもなく、霊夢は窓を開け飛び立つ。

「じゃあね」

そして立ち尽くす真人の後ろでは、レミリアと咲夜がニヤニヤしていた。

嵌められたのだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0941x/>

---

東方真偽混

2011年11月4日10時19分発行